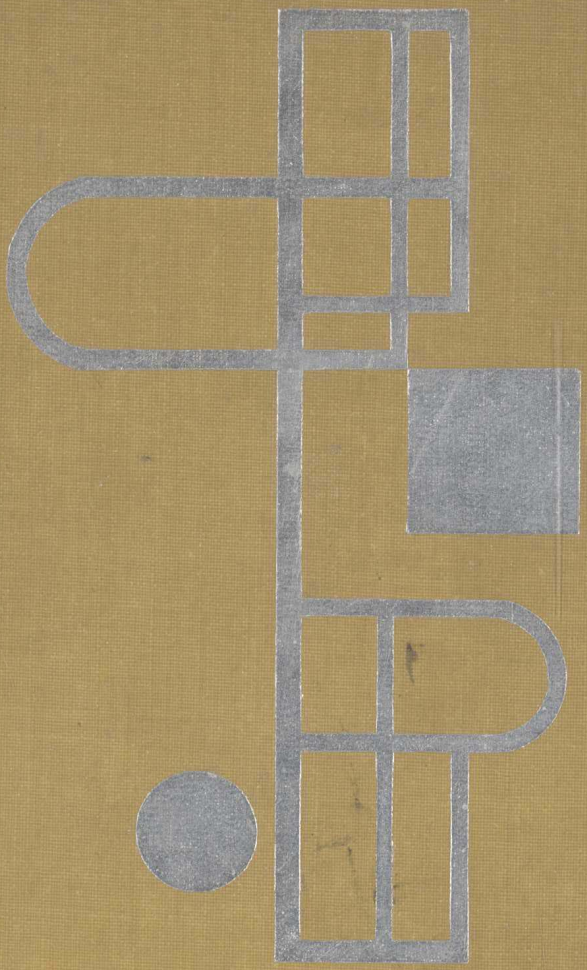
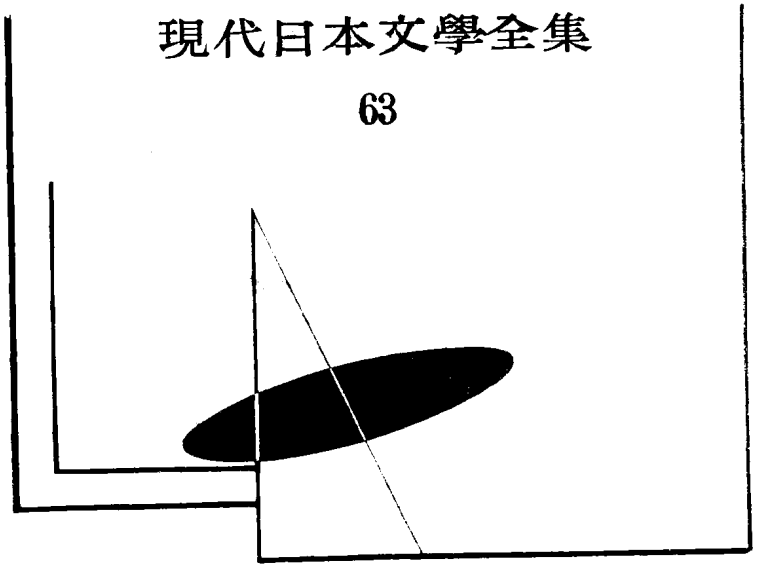


德田秋聲集

(二)

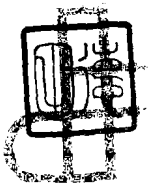
現代日本文學全集

63



筑摩書房版

現代日本文學全集 63



徳田秋聲集（二）

昭和三十二年十一月二十日 印刷
昭和三十二年十一月二十五日 發行

著者 徳田秋聲

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
（電話）東京二九局(29)七六五一（代表）
振替 東京一六五七六八

整版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 鈴木製本所

徳田秋聲集(二)　目次

足　迹……五
黴……六
奔　流……一四七
出　産……二三三
足袋の底……二三七
犠牲者……二四六
感傷的の事……二六六
お品とお島の立場……二七三
「フアイヤガン」……二八一
車掌夫婦の死……二八六
籠の小鳥……二九五
不安のなかに……三〇一

挿話……三二三
折鞄……三二九
元の枝へ……三三六
暑さに喘ぐ……三五五
齒痛……三六五
和解……三七二
死に親しむ……三八一
二つの現象……三九二
勳章……四〇三
德田秋聲の文學（白井吉見）……四一〇
解說……四一九

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

德田秋聲集

(二)

足迹

一

お庄の一家が東京へ移住したとき、お庄は漸と十一か二であつた。

まさかの時の用意に、山畑は少しばかり殘して、後は家屋敷も田も悉皆賣拂つた。煤けた塗箪笥や長火鉢や膳椀のやうなものまで金に替へて、それを不殘父親が縫立の胴卷に仕舞込んだ。

「どうせこんな田舍柄は東京にゃ流行らないで、こんらも古着屋へ賣つちまはう。東京でうまく取着きさへすれア衆に好いものを買つて着せるで心配はない。」

とかく愚痴ツぽい母親が、奥の納戸でゴツゴツした手織縞の着物を引張つたり疊んだりしてゐると、前後の考のない父親が恁う云つて主張した。これ迄にも散々道樂を爲盡して、どうか恁うか五人の子供を育てあげるに差閊へぬ位の身代を飮潰してしまつた父親は、妻子を引連れて何處か面白いところを見物に行くやうな心持でゐた。

それ迄に夫婦は長いあひだ、身上を仕舞ふ仕舞はぬで幾度となく揑着した。母親は其度に色色の場合の事を言出して、一つ〳〵無くなつた物を數へたてた。

「あんらも今有れア假令東京へ行くにしたつて可恥い思はしないに。」と、碌に手を通さない紋附や小紋のやうなものを縫直しにやると云つて、一ト背負ひ町へ持出して行かれた事などを、くど〳〵と零した。自分で苦勞して、養蠶で取つた金を夕方裏の川へ出てゐる一寸の間に、ちよろりと占めて出て行つたきり、色町へ入浸つて、七日も十日も歸らなかつた事なども、今更のやうに言立てられた。すると父親は煙管を筒にしまつて腰へさすと、ぷいと爐端を立つて向の本家へ外してしまふ。

お庄は母親が、賣るものと持つて行くものとを、丹念に選分けて、仕舞つたり出したりしてゐる傍に坐込んで、是迄に見たこともない小片や袋物、古い押繪、珊瑚珠のやうな物を、不思議さうに選出して弄つてゐた。中には顎下腺炎とかで死んだ祖母さんの手の迹だと云ふ黴くさい巾着などもあつた。お庄は自分の產れぬ前のことや、稚いをりのことを考へて、暗い懷かしいやうな心持がしてゐた。

家がすつかり片着いて、起つ二日ばかり前に一同本家へ引揚げた時分には思斷のわるい母親の心もいくらか紛されてゐた。明るい方へ出て行くやうな氣もしてゐた。

父親は本家の若い主と朝から晩まで酒ばかり飮んでゐた。村で目星い家は、何處かで緣が繫つてゐたので、それらの人々も、餞別を持つて來ては、入替り立替り酒に浸つてゐた。山國の五月は漸と櫻が咲く時分で裏山の松や落葉松の間に、微白いその花が見え、桑畑はまだ灰色に、田は雪が消えたまゝに柔かく黝んでゐた。

道中は可成に手間取つた。汽車のある處まで出るには、五日もかゝつた。馬車の通つてゐるところは馬車に乘り、人力車のある處は人力車に乘つたが、子供を負つたり、手を引張つたりして上るやうな嶮しい峠もあつた。父親は早目に其日の旅籠へつくと、伊勢參宮でもした時のやうに悠長に構込んで酒や下物を取つて、恣に飮んだり食つたりした。

「田舍の地酒も此がお仕舞だで、お前もまあ坐つて一つ遣れや。」と、父親はきちんと坐つて、しや嗄れたやうな聲で言つて、妻に酒を注いだ。

母親は泣立てる乳呑兒を抱へて、お庄の明朝の髪を結つたり、下の井戸端で襁褓を洗つたりした。雨の降る日は部屋でそれを乾さなければならなかつた。

「鼻汁をたらしてゐると、東京へ行つて笑はれるで、綺麗に行儀を好くしてゐるだぞ。」と、父親はお庄の涕汁なぞを拭んでやつた。氣の荒い父親も旅へ出てからの妻や子に對する心持は優しかつた。

或町場に近い溫泉場へつれて行つた時、父親はそこで三日も四日も逗留して、終に藝者をあげて騷ぎだした。

二

一行が廣い上野のプラツトホームを、押流されるやうに出て行つたのは、或蒸暑い日の夕方であつた。

父親は鞄に二本からげた傘を通して、それを垂下げ、ぞろ〳〵附いて來る子供を引張つてベンチの處へ連れて行くと、母親も泣立てる背中の子を搖り〳〵襁褓の入つた包を持つて、目間苦しい群衆のなかを目の色を變へて急いで行つた。停車場では蒼白い瓦斯燈の下に、夏帽やネルを着た人の姿がちらほら見受けられた。

そこで一休みしてから、「私はまあ後で行くで、お前達は人力車で一足先へ行つとれ。」と云つて、能く東京を知つてゐる父親は物馴れたやうな調子で、構外へ出て人力車を三臺誂へた。行先は母親の側の緣續きであつた。父親は妻や子供をぞろ〳〵引張つて、そこへ入つて行くのを好まなかつた。

「それぢや私は先へ行つてをりますで、明朝は如何でも來て下さるだらうね。」母親は行李を一つ股の下へ挿んで、車夫が梶棒を持上げたときに、咽喉の塞がりさうな聲を出して言ふと、父親は頷いて傘に包を一つ下げながら、帽子を傾げて停車場前の廣場へ出て行つた。

お庄は尻から二番目の妹と、一つの人力車に乘せられた。汽車に乘る前に、父親に町で買つて貰つた花簪などを大事さうに頭髮にさしてゐた。

人力車は湯島の邊を彼方此方まごついた。坂の上へあがると、煙突や灯の影の多い廣い東京市中が、海のやうな濛霧の中に果もなく擴つて見えたり、狹いごちや〳〵した街が、幾箇も幾箇も續いたりした。そのうちに日が悉皆暮れた。

門構や板塀圍ひの家の多い町へ來たとき、がた人力車の音が耳につくくらゐ其處らが暗くシンとしてゐた。そこは明神の深い森の影を受けてゐるやうな處で、地面が低く空氣がしつとりして居た。碧桐の蔭に埃を冠つた瓦斯の見える或下宿屋の前へ來かゝつたとき、母親と車夫との話聲を聞きつけて、薄暗い窓の簾のうちから、「鴨川の姉さまかね。」と云つて、母親の實家の古い屋號を聲をかけるものがあつた。見るとそこに髭深い丸い顏が、近眼鏡を光らしてニコニコしてゐる。

その顏は直に入口の格子戸の方へ現れた。

「おや、みんな遣つて來た〳〵。」と云ふ、この女主の聲も耳に入つた。

少時すると帳場の次の狹苦しい部屋で物の莫迦丁寧な母親と、此處の人達との間に長い挨拶が始まつた。

氣象の烈しい女主は、くどいお辭儀を續けてゐる母親を見下すやうにして、「東京は田舍と異つて、何にもしずに、ぶら〳〵遊んでゐるやうな者は一人もゐないで、爲さあのやうな精のない人には、遣つて行かれるか如何だか私ア知らねえけれど、まづ一ト通や二タ通のことでは駄目だぞえ。」と、づけ〳〵言つた。

「さうでござんすらいに……。」と、母親は淋しい笑顏を作つて、ずらりと傍に並んで坐つた子供を見遣つた。

子息の菊太郎は、ニコ〳〵しながら茶をいれて衆に侑めた。

「大きくなつたな。お庄さんは幾歲になるえね。」と、お庄の丸い顏を覗込んだ。

部屋には薄暗いランプが點されて、女主の後から三男の繁三が黑い顏に目ばかりグリ〳〵させて、田舍から來た子供の方を眺めてゐた。

やがて繁三につれられて、お庄は弟と一緒に近所の洗湯へやられた。

三

その晩お庄は迷子になつた。

「お庄ちやんは女だから、其方へお入り。」と、お庄はパツト明るい女湯の中へ送込まれて、一人できよろ〳〵してゐた。そこには見たこともない大きな姿見がつる〳〵してゐた。お庄は日燒のした丸い顏や、田舍々々した紅入友染の帶を胸高に締めた自分の姿を見て、ぼツとしてゐた。

湯から上つてみると、男湯の方にはもう繁三も弟も見えなかつた。お庄は一人で暗い外へ出ると、溫かい湯の匂のする溝際について、ぐんぐん歩いて行つたが、何處へ行つても同じやうな家と町ばかりであつた。お庄は先刻車夫が上つたやうな暗い坂を上つたり下りたり、同じ下宿屋の前を二度も三度も往來したりした。するうちに町が段々更けて來て、今まで明るかつた二階の板戸が、もう締まる家もあつた。

菊太郎と繁三とが捜しに來た頃には、お庄は歩き疲れて、軒燈の薄暗い、と有る店屋の緣臺の蔭に跪坐んで、目に涙を入染ませながらぼんやりしてゐた。

「お前まあ今迄どこに居ただえ。」女主は帳場の奥から、歸つて來たお庄に聲かけた。

「東京には人浚と云ふ可怕いものがをるで、氣をつけないと可けないぞえ。」

お庄はメソ〳〵しながら、母親の側へ寄つて行つた。

ごちや〳〵した部屋の隅で、子供同士頭臚を並べて寢てからも、女主と母親と菊太郎とは、長火鉢の傍で何時までも話し込んでゐた。

「爲さあは、何をして六人の子供を育てて行く心算だかしらねえけれど、取着くまでには、まあ餘程骨だぞえ。」と、女主は東京へ出てからの自分の骨折などを語つて聞かせた。

「私らも、田舍でこそ押しも押されもしねえ家だけれど、東京へ出ちや女一人使ふにも遠慮をしないぢやならないで……。」

田舍では問屋本陣の家柄であつた女主は、良人が亡つてから、自分の經營してゐた製絲業に失敗して、それから東京へ出て來た。而して下宿業を營みながら、三人の男の子を醫師に仕立てようとして居た。それ迄に商賣は幾度となく變つた。

翌日父親が來たとき、母親と子供は、狹い部屋に蠢々してゐた。

「とにかく如何な處でも可いで、家を一つ捜さないぢや……話は其からの事ですつて。」と、父親は落着拂つて莨を喫してゐた。

午後に菊太郎と父親とは、近所へ家を見に出た。家は直ぐに決つた。直横町の路次のなかに、此頃新しく建てられた、安普請の平屋がそれで。二人はまだ泥壁に鋸屑の散つてゐる狹い勝手口から上つて行くと、臺所や押入の工合を見てあるいた。

「田舍の家から見れア手狹いもんだでね。」と、菊太郎は砂でざら〳〵する靑疊の上を、浮足で歩きながら笑つた。

「まあ假だで如何でも好い。新しいで結構住へる。東京ぢや、これで坪二十圓もしますら。」

晩方には、もう其處へ移るやうな手續が出來てしまつた。

下宿からは、差當り必要な古火鉢や茶呑茶碗、雜巾のやうな物が運ばれ、父親は通からランプや油壺、七輪のやうな物を、一つ〳〵買つては提込んで來た。母親は木の香の新しい臺所へ出て、ゴシ〳〵働いてゐた。

その間お庄は、乳呑兒を背に縛りつけられて、下宿と引越先との間を、幾度となく通つてゐた。

四

點燈頃に其處らが漸う一片着き片着いた。

廣い田舍家の奥に閉籠つて、餘り外へ出たことのない母親は、近所の女房連の集つてゐる井戸端へ出て行くのが、何より厭であつた。子供達も行詰つた家のなかを、其方此方うろつきながら、何にもない臺所へ出て來ては水口の處に直り喰着いて、暮れて行く路次を眺めてゐた。お庄は出たり入つたりして、そこらの門口にゐる娘達の頭髮や身裝を遠くからじろ〳〵見てゐた。

父親は買立のバケツを提げて、水を汲みに行つたり、大きな軀で七輪の前に跪坐んで、煮物の加減を見たりした。

「こんな流しは私ア初めて見た。東京には田舍のやうな上流しはありましねえかね。」

「無いこともないが田舍は何でも仕掛が豪いで。まア東京に少し住んで見ろ。田舍へなぞ歸つて迚も居られるものではないぞ。」

「何だか知らねえが、私は家のやうな氣がしましねえ。」母親は滌いでゐた德利をそこに置いたまゝ、何も彼も都合の好く出來てゐる、田舍のがつしりした古家を可懷しく思つた。

父親が、明るいランプの下でちび〳〵酒を始めた時分に、子供達は其處にずらりと並んで、もく〳〵蕎麥を喰ひはじめた。母親は額に汗を入染ませながら、荒い鼻息の音をさせて、すかすかと乳を食つてゐる碧兒の顏を見入つてゐた。

「今漸と晩御飯かえ。」と、下宿の主婦は裏口から聲かけて上つて來た。

「皆な今迄何してゐただえ。」

「お疲れなさいまし。」母親は重い調子でお辭儀をして、「何だか馴れねえもんだでね。」と、分疏らしく言つた。

「それでもお蔭で、如何か恁うか寢る處だけは

出來ましたえ。まア一つ。」と父親は猪口をあけて差した。

主婦は落着いて酒も飲んでゐなかつた。而してじろ〳〵子供達の顏を見ながら、「爲さあは是から何をする心算だか知らねえが、かう大勢の口を控へてゐちやなか〳〵遣切れたものぢやない、一日でも遊んでゐれア其だけ金が減つて行くで。」

父親は平手で額を撫であげながら、默つてゐた。父親の氣は、まだそこ迄決つてゐなかつた。行つて見たいやうな商賣を始めるには、資本が不足だし、軀を落して働くには年を取過ぎてゐた。如何にかして取着いて行けさうな商賣を、それか此かと考へてみたが、是ならばと思ふやうなものも無かつた。

「私も考へてゐることもありますで、まア少し此方の樣子を見たうへで。」と、父親は餘り好い顏をしなかつた。

「相場でもやらうちふのかえ。」主婦はニヤニヤ笑つた。

「そんな事して、摺つてしまつたら如何する氣だえ。私はまア何でも好いから、資本のかゝらない、取着きの速いものを始めたら可からうかと思ふだがね。」

父親は聽きつけもしないやうな顏をしてゐた。

「それに一昨日神田の方で、少し賴んでおいた口もありますで。」

「然うですかえ。けど、そんな人賴をするより、寧そ誰にでも出來る氷屋でも出せア可いに。氷屋で仕上げた人は隨分あるぞえ。綺麗事ぢや金は儲からない。」

「氷屋なぞは夏場だけのもんですつて。第一あんなものは忙しいばつかりで一向儲が細い。」

母親も心細いやうな氣がしだした。氷屋をする位ならば……とも思つた。

三

「田舍ツぺ、寶ツぺ、明神さまの寶ツぺ。」と、善く近所の子供連に囃されてゐたお庄の田舍訛が大分除れかゝる頃になつても、父親の職業は、まだ決らなかつた。

父親は思案に倦ねて來ると、道樂をしてゐた時分拵へた、印傳の煙草入を角帶の腰にさして、のそ〳〵と路次を出て行つた。行先は大抵決つてゐた。下宿屋の主婦にがみ〳〵言はれるのが厭なので、此頃は其前を多くは素通りにすることにしてゐた。而して鯛殼町の方へ入込んでゐる村で同姓の知合を、神田の鍛冶町に訪ねるか、石川島の會社の方へ出てゐる妻の弟を築地の家に訪ねるかした。時とすると横濱で商館の方へ勤めてゐる自分の弟を訪ねることもあつた。濱からは能く强い洋酒などを貰つて來て、黃金色した其酒を小さい杯に注ぎながら、日に透して見ては美さうに嘗めてゐた。

「濱の弟も、酒で鼻が眞紅になつてら。こんらの酒ぢや、もう利かねえと云ふこんだ。金にして餘程飲むら。」

「あの衆らの飲むのは、器量があつて飲むだで可い。身上も餘程出來たらうに。」

「何が出來るもんだ。それでも娘は二人とも大きくなつた。男の子が一人欲しいやうなことを言つてるけれど、遣らずか遣るまいか、まアもつと先へ寄つてからの事だ。」

その頃から、父親は能く夢中で新聞の相場附を見たり、夜深に外へ飛出して、空と睨ツ競をしたりしてゐた。朝から出て行つて、一日歸らないやうな事もあつた。するうちに金が段々減つて行つた。四月弱の居喰で、目に見えぬ出錢も少くなかつた。

「手を汚さないで、甘いことをしようたつて駄目の皮だぞえ。爲さあらまだ苦勞が足りない。」下宿屋の主婦は留守に遣つて來ると、妻に蔭口を吐いた。而して、「お安さあもお安さあだ。是迄裸に剝がれて此上何をぬぐ氣だえ。默つて見てばかりゐずと、些と言つてやらつし。」と云つて窘めた。母親は切ないやうな氣がして、默つてゐた。

母親は、押入の葛籠のなかから、子供の冬物を引張り出して見てゐた。田舍から除けて持つて來てた、丹念に始末をしておいた手織物が、東京でまた役に立つ時節が近づいて來た。その藍の匂をかぐと、母親の胸には田舍の生活がしみじみ想出された。

父親は一日出歩いて晩方歸つて來ると、こそこそと家へ上つて、火鉢の傍に坐込んだ。傍にお庄兄弟が、消炭の火を吹きながら玉蜀黍を炙つてゐた。六つになる弟と四つになる妹とが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

附燒にした玉蜀黍を甘さうに嚙つてゐる。父親はお庄の眞赤になつて炙つてゐる玉蜀黍を一つ取上げると、彈切れさうな實を三粒四粒指で拶つて、前齒でぽつり〳〵嚙み始めた。四方はもう暗かつた。薄寒いやうな風が、障子を開けた緣から吹いて來た。母親はそこに色々な物を引散かしてゐた。

「日の暮れるまで何をしてるだか……。」と父親は舌鼓をして、煙管を筒から拔いた。

「何か遣出せア、それに凝つて、子供に飯食はすことも點火すことも忘れてしまつてゐる。」

母親は急に出てゐたものを引括めるやうにして、「忘れてゐると云ふでもないけれど、着せる先へ立つて、揚が短いなんて云ふと困ると思つて。」

六

丑年の母親は、仕舞ひさうにしてゐた葛籠の傍を尙もぞくさして居た。父親が二タ言三言小言を言ふと、母親も口のなかでぶつくさ言出した。きちんと坐込んで莫を喫つてゐた父親が、いきなり起上ると、子供の着物や母親の襦袢のやうな物を、兩手で搔浚つて、ジメ〳〵した庭へ捏ねて投出した。庭には虫の鳴くのが聞えてゐた。

お庄が下駄を持つて來て、それを緣側へ拾揚げる頃には、父親は箒を持出して、さツさと部屋を掃きはじめた。母親が爲ることなしに座を起つと、子供も火鉢の側を離れてうろ〳〵してゐた。お庄は泣出す小さい子を負出すと、手に玉蜀黍を持つて狹い庭をぶら〳〵しながら家の樣子を見てゐた。父と母とは臺所で別々の事を働きながら言合つてゐた。

お庄は薄暗い緣側に腰かけて、母親のことを氣の毒に思つた。放埒な氣の荒い父親が、是迄に田舍で働いて來たことや、一家のまごつき初めた徑路などが、朧げながら頭腦に考へられた。お庄が覺えてから、父親が家に落着いてゐるやうな日は殆どなかつた。上州から流込んで來た村の達磨屋の年增のところへ入浸つてゐる父親を、お庄は能く迎に行つた。その女は腕に文身などしてゐた。繻子の半衿のかゝつた軟かものの半纏などを引被けて、煤けた障子の外へ出て來ると、お庄の手に小遣を攝ませたり、菓子を懷ろへ入れてくれたりした。長く家へ留めておいた上方ものの母子の義太夫語のために、座敷に床を拵へて、人を集めて語らせなどした時の父親の擧動は、今思ふと全然狂氣のやうであつた。母親も着飾つて、能く女連と一緒に坐つて聽いてゐた。父親や村の若い人達は終に浮出して、愛らしい娘を取卷いて、明るい燭臺の陰で、綺麗な其目や頰に吸ひつくやうにして巫山戲てゐた。お庄は極可恥しい念をして、其義太夫語に何やら少しづつ敎はつた。

「妾に此お子を四五年預けておくれやす、きツと物にしてお目にかけます。」と太夫は言つてゐたが、父親はこんな無器用ものには、藝事は迚もダメだと言つて眞面目に失望した。

秋風が吹いて、收穫が濟む頃には、能く夫婦の祭文語が入込んで來た。薄汚い祭文語は爐端へ呼入れられて、鈴木主水や刈萱道心のやうなものを語つた。母親は時々こくり〳〵と居睡をしながら、鼻を塞らせて、下卑た其文句に聽惚れてゐた。田のなかに村芝居の立つ時には、父親は頭取のやうな役目をして、高い處へ坐込んで威張つてゐた。

養蠶時の忙しい時期を、父親は村境の峠を越えて、四里先の町の色里へしけ込むと、きツと迎の出るまで歸つて來なかつた。迎に行つた男は二階へ上ると、持つて行つた金を捲揚げられて、一緒に飲潰れた。而して又幾日も二人で流連してゐた。

夜の目も合さず衆が立働いてゐる處へ心も體も酒に爛れたやうな父親が、嶮しい目を赤くして夕方歸つて來ると、自分で下物を拵へながら、爐端で二人が又迎酒を飲みはじめる。棄てくさつたやうな鼻唄や笑聲が聞えて、誰も傍へ寄りつくものがなかつた。

お庄は剛情に坐込んで、薪片で打たれたり、足蹴にされたりしてゐる母親の樣子を幾度も見せられた。火の點いてゐるランプを取つて投げつけられ、頰からだら〳〵流れる黑血を抑へて、跣足で暗い背戸へ飛出す母親の袂に喰着いて走出した時には、心から父親を可恐しいもののやうに思つた。

七

そんな事を想出してゐる間に、父親は鐵炙で鹽肴の切身を炙つたり、浸しのやうなものを拵へたりした。

「お庄や、お前通まで行つて酢を少し買つて來てくれ。」父親は戸棚から瓶を出すと、明るい方へ透して見ながら言つた。

「酢が切れようが砂糖がなくならうが、一向平氣なもんだ。そらお鳥目……。」と、父親は懷の財布から小錢を一つ取出して、そこへ投出した。

「あれ、まだ有ると思つたに……。」と、ランプに火を點してゐた母親は振顧つて言はうとしたが、業が沸くやうで口へ出なかつた。母親の胸には、是迄亭主に爲れた事が、一つ〳〵新しく想出された。

お庄は氣爽に、「ハイ」と云つて、水口の後の竿にかゝつてゐた、鹽氣の染込んだやうな小風呂敷を外して、瓶を包みかけたが、父親の用事をするのが、何だか小癪のやうにも考へられた。常磐津の師匠のところへ通つてゐる向うの子でも、仲好の通の古着屋の子でも、一度も自分のやうな吝れた使に出されたことがなかつた。些としたことで、弟を啼かすと、直に飛びかゝつて來て引摑んで、呼吸のつまりさうな厚い大きな田舍の夜具にぐる〳〵捲にされて、暗い納戸の隅に放拋つておかれたり、袈がびしよびしよ降つて寒い狐の啼聲の聞える晩に、背戸へ締出を喰はしておいて、自分は暖かい炬燵に高鼾で寢込んでゐたやうな父親に、子供は子供なりの反抗心も持つて來た。

お庄は何の家でも、明るい餉臺の上にこてこてと食物が並べられ、長火鉢の側で晩飯の箸を動かしてゐる、賑かな夕暮の路次口を出て行くと、內儀さん連の寄つてゐるやうな明るい店家の前を避けるやうにして、溝際を傳つて歩いてゐた。何時も立停つて聞くことにしてゐる通の師匠の家では、この頃聞覺えて、口癖のやうになつてゐるお駒才三を誰やらがつけて貰つてゐた。お庄は瓶を抱へたまゝ、暗い片陰に暫くイんでゐた。

お庄は振のやうな手容をして、ふいとそこを飛出すと、極り惡さうに四下を見廻して、酒屋の店へ入つて行つた。

急いで家へ歸つて來ると、父親はランプの下で、苦い顏をして酒の燗をしてゐた。子供達は餉臺の周に居並んで、手々に食物を獵つてゐた。

母親は手元の薄暗い流元に跪坐込んで、ゴシゴシ米を精いでゐた。水をしたむ間、ぶす〳〵愚痴を零してゐる聲が奥の方へも聞えた。お庄は又母親のお株が始まつたのだと思つた。父親は其度に苛々するやうな顏に青筋を立てた。

母親が襷をはづして、火鉢の傍へ寄つて來る時分には、父親はもう散々醉つてそこに横はつてゐた。お庄は、氣味のわるいもののやうに、鼻の高い、鬢毛の薄い、其大きな顏や、脛毛の疎な、色の白い長い其脚などを眺めながら、母親の方へ片寄つて、飯を食ひはじめた。

母親の口には、まだぶす〳〵云ふ聲が絕えなかつた。臆病なやうな白い眼が、をり〳〵じろりと父親の方へ注がれた。張つた其胸を突出して、硬い首を据ゑ、東京へ來てからまだ一度も鐵漿をつけたことのないやうな、齒の汚い口に、音をさせて飯を食つてゐる母親の樣子を、能く憎さげに眞似してみせた父親の顏に思合せて、お庄は厭なやうな氣がした。達磨屋の年增や、義太夫語の顏などをお庄は目に浮べて、母親は樣子が惡いとつくづく然う思つた。

へ

次の年の夏が來る迄には、お庄の一家にも色色の變遷があつた。暮には殘しておいた山畑を賣りに父親が田舍へ出向いて行つて、その金を持つて歸つて來ると、漸く諸拂を濟して、お庄兄弟のためにも新しい春着が裁縫され、下駄や簪も買へた。お庄等は田舍から持つて來た干栗や、氷餅の類をさも珍しいもののやうに思つて悅んだ。正月にはお庄も近所の子供並に着飾つて、羽子など突いてゐたが、其頃から父親は時々家をあけた。

下宿の主婦は、「爲さあは、金が少し出來たと思つて、何處を毎日然うぶら〳〵歩いてばかりゐるだい。」と、來ては厭味を言つてゐた。

父親はニヤリともしないで、「私も然う何時までぶら〳〵しては居られないで、今度と云ふ今度は商賣を遣らうと思つて、その事で色々用事もあるで……。」と言うてゐたが、父親の目論見では、田舍の町で知つてゐる女が淺草の方

で化粧品屋を出してゐる、その女に品物の仕入方を教はつて、同じ店を小體に出して見ようと云ふ考へであつた。

お庄は一月の末に、父親に連れられて一度其女の家へ行つた。母親も薄々此女のことは知つてゐた。田舍からの父親の昵みで、ずつと以前に、商賣を罷めて、其抱主と一緒に東京へ來てゐた。抱主は十八九になる子息と年上の醜い內儀さんとを置去にして、二人で相當な商ひに取着けるほどの金を浚つて、女をつれて逃げて來た。その頃にはその樓の內所も大分左前になつてゐた。

其亭主は大して患ひもしないで、去年の秋の頃に死んでから、男手の欲しいやうな時に、父親が何かの相談相手に、ちよい〳〵顏を出し出ししてゐた。母親は、喧嘩の時は、其事も言出したが、不斷は忘れたやうになつてゐた。父親は櫛など薄い紙に包んで來て、私と鏡臺の上に置いてくれなどした。

「こんらも高いものについてゐるら。」と言つて、母親は櫛を手に取つて吐出すやうに言つたが、抽斗の奧へ仕舞込んで、碌に挿しもしなかつた。棄てるのも惜しかつた。

お庄は手鈍い母親に、二時間もかゝつて、顏や頸を洗つて貰つたり、髮を結つて貰つたりして、もう猫になつたやうな白粉までつけて出て行つた。お庄は母親の髮の弄り方や結方が無器用だと云つて、鏡に向つてゐながら、頭髮をわざと振りたくつたり、手を上げたりした。父親も側で莨を喫ひながら口小言を言つた。

「人に髮を結つてもらつて、今からそんな雲上を言ふものぢやないよ。」と、母親も癇癪を起して、口を尖らかしてぶつ〳〵言ひながら、髮を引張つてゐた。

「庄ちやんの髮の癖が悪いからだよ。」

「阿母さんに似たんだわ。」お庄もべろりと舌を出した。

その女の家は、雷門の少し手前の横町であつた。店にはお庄の見恍れるやうな物ばかり並んでゐたが、そこに坐つてゐる女の樣子は、お庄の目にも、餘り好いとは思へなかつた。薄い毛を銀杏返に結つて、半衿のかゝつた双子の上に軟かい羽織を引つかけて、體の骨張つた、血氣の薄い三十七八の大女であつた。

「おや、お庄ちやん來たの。」と云ふやうな調子で、細い寢呆けたやうな目尻に小皺を寄せた。

父親は直に奧の方へ上つて行つた。奧は暗い茶の間で、疊も汚く天井も低く窮屈であつたが、火鉢や茶簞笥などはつる〳〵してゐた。その又奧の方に、簞笥など据ゑた部屋が一つ見えた。

お庄は膝へ乘つかつて來る猫を氣味悪がつて、尻をもぞ〳〵させてゐると、女は長火鉢の向からじろ〳〵見て笑つてゐた。

九

父親とその女との話は、お庄には解らないやうなことが多かつた。女はお庄のまだ知らないお庄の家のことすら知つてゐた。田舍の緣類の人の噂も出た。お庄は何處か父親に肖てゐるとか、此處が母親に肖てゐるとか云つて、顏をじろじろ見られるのが、むづ痒い樣であつた。

「庄ちやん、小母さんとこの子に成つておくれな、小母さんが大事にして其處ら面白い處を見せてあげたりなんかするからね。」と言つたが、お庄には、默つてゐる父親にも、その心持があるやうに思へた。

女はそこらを搜して銀貨を二つばかりくれると、「お庄ちやん、公園知つてゐて。觀音さまへ行つたことがあるの。賑かだよ。」と云つて訊いた。

「知つてるとも、直ぐそこだ。」父親は長い頸を突出した。

「獨ぢや如何だかね。」

「何、行けるとも。それは豪いもんだ。」

お庄は銀貨を帶の間へ挾んで、家だけは威勢よく駈出したが、餘り氣が進まなかつた。一二度來たことのある釣堀や射的の前を通つて、それからのろ〳〵と池の畔の方へ出て見たが、人込や樂隊の響に怯けて、何處へ行つて何を見ようと云ふ氣もしなかつた。

お庄は活人形の並んだ見世物小屋の前に彳んで、其目や眉の動くさまを、不思議さうに見てゐたが、煩く客を呼んでゐる木戸番の男の惡黠いやうな目や、別の人間かと思はれるやうな奇妙な聲が氣になつて、長く見てゐられなかつた。幕の外に出てゐる玉乘の女の異樣な扮裝や、大きい女の鬘を冠つた猿の顏にも、釣込まれるや

うなことはなかつた。

今の家と同じやうな小間物店や、人形屋の前へ來たとき、お庄は帶の間の銀貨を氣にしながら、自分にも買へるやうなものを、そつち此方見て歩き〳〵したが、するうちに店が盡きて、寒い木立際の道へ出て來た。

公園を出た頃には、そこらに灯の影がちらちら見えて、見世物小屋の旗や幕のやうなものが、劇しい風にハタ〳〵と吹かれてゐた。お庄は何時頃歸つて可いか解らないやうな氣がしてゐた。

歸つて行くと、父親は火鉢の側で、手酌で酒を飲んでゐた。女も時々來ては差向に坐つて、海苔を摘んだり、酌をしたりしてゐたが、するうちお庄も傍で鮓など食べさせられた。

「お前今夜こゝで泊つて行くだぞ。」父親は酒がまはると言出した。

「この小母さんが、店の方がちと忙しいで、お前が居て暫く手傳するだ。」

「私歸つて家の阿母さんに聽いて見て……。」お庄は紅味のない丸い顏に、泣出しさうな笑を浮べた。

「阿母さんも承知のうへだで可い。」

お庄は默つて俯いた。

「お庄ちゃん、厭……初めての家は矢張厭なやうな氣がするんでせうよ。」と、女は傍の方を向きながら、拭巾で火鉢の緣を拭いてゐた。

「お前はもう十三にもなつたもんだで、其位の事は何でもない。」

「少し呢んでからの方が可いでせうよ。」と、女も氣乘のしない顏をしてゐた。

お庄は其晩、簪など貰つて歸つた。

花見頃には、お庄も學校の隙に此處の店番をしながら、袋を結へる觀世綯など綯らされた。

十

品物の出入や飾付、値段などを少しづつ覺えることはお庄に取つて、さまで苦勞な仕事ではなかつたが、此女を阿母さんと呼ぶことだけは空々しいやうで、如何しても調子が出なかつた。加之女は長いあひだの商賣で體を惡くしてゐた。時々頭の調子の變になるやうなことがあつて、如何かすると可恐しい意地惡なところを見せられた。お庄は此女の顏色を見ることに慣れて來たが、偶に用足しに外へ出されると、家へ歸つて行くのが厭でならなかつた。

お庄は空腹を抱へながら、公園裏の通をぶらぶら歩いたり、靜かな細い路次のやうな處に彳んで、入染出る汗を袂で拭きながら、何時までも茫然してゐることが度々あつた。

慵い體を木蔭のベンチに腰かけて、袂から甘納豆を撮んでは私と食べてゐると、池の向うの柳の蔭に、人影が夢のやうに動いて、氣疎い樂隊や囃の音、騷々しい銅鑼のやうなものの聲が、重い濁つた空氣を傳はつて來た。するうちに、澱んだやうな碧い水の周に映る灯の影が見え出して、木立のなかには夕暮の色が漂つた。

女は、歸つて來たお庄の顏を見ると、

「この人は如何したつて家に呢まないんだよ。」と言つて笑つた。店には此頃出來た、女の新しい亭主も坐つて新聞を見てゐた。亭主は女より七八つも年が下で、何處か薄ンのろのやうな樣子をしてゐた。この男は、何時どこから來たともなく、此處の店頭に坐つて、亭主ともつかず傭人ともつかず、商の手傳などすることになつた。お庄は長い其顏が何時も弛んだやうで、口の利方にも締のない此男が傍にゐると、肉がむづ痒くなるほど厭であつた。男はお庄ちやんお庄ちやんと云つて、嘗めつくやうな優しい聲で狎々しく呼びかけた。

男は晩方になると近所の洗湯へ入つて額や鼻頭を光らせて歸つて來たが、夜は寄席入りをしたり、公園の矢場へ入つて、楊弓を引いたりした。夜遊に耽つた朝は何時までも寢てゐて、內儀さんにぶつ〳〵小言を言はれたが、夫婦で寢坊をしてゐることも稀しくなかつた。

お庄は寢かされてゐる狹い二階から起きて出て來ると、時々獨で臺所の戶を開け、水を汲んで來て、釜の下に火を焚きつけた。親達が横濱の叔父の方へ引寄せられて、そこで襯衣や手巾ショールのやうな物を商ふことになつてから、東京にはお庄の歸つて行く處もなくなつた。お庄は襷をかけたまゝそこの板敷に腰かけて、眠いやうな、うつとりした目を外へ注いでゐたが、胸には色々の事が取留もなく想出された。水弄をしてゐると、もう手先の冷々する秋の頃で、着物のまくれた白脛や脇明のところから、寢熱のするやうな肌に當る風が、何となく厭なやう

な氣持がした。

お庄は雜巾を絞つてそこらを拭きはじめたが、薄暗い二人の寢間では、まだ寢息がスウ〳〵聞えてゐた。

お庄は裾を卸して、寢床の下の方から二階へ上つて行くと、押入のなかから何やら巾着のやうな物を取出して、赤い帶の間へ挾んだが、又偸むやうにして下へ降りて行つた頃に、亭主が漸く起出して、袖や裾の皺くちやになつた單衣の寢衣のまゝ、欠をしながら臺所から外を見ながら跪坐んでゐた。

お庄は體が縮むやうな氣がして、そのまゝバケツを提げて水道口へ出て行つた。泡を立てて充滿ちて來る水を番しながら考込んでゐたお庄は、旋て的もなしに其處を逃出した。

十

お庄はごちや〳〵した裏通の小路を、其方へゆき此方へ脫けしてゐるうちに、觀音堂前の廣場へ出て來た。紙片、莨の吸殼などの落散つた汚い地面はまだ濕りして、木立や建物に淡い濛靄がかゝり、鳩の啼聲が濕氣のある空氣にボツボツと聞えた。忙しさうに境內を突切つて行く人影も、大分見えてゐた。お庄はこゝまで來ると、急に心が鈍つたやうになつて、澁くる足をのろ〳〵と運んでゐたが、するうちに、堂の方を拜むやうにして、旋て仁王門を潛つた。

仲店はまだ緣臺を上げたまゝの家も多かつた。お庄は暗いやうな心持で、石畳のうへを歩いて行つたが、通の方へ出ると間もなく、柳の蔭の路側で腕車を決めて乘つた。

「湯島までやつて頂戴な。」と、お庄は四邊を見ないやうにして低い聲で言ふと、ぽくりと後の方へ體を落して腰かけた。

上野の廣小路まで來た頃に、空の雲が少しづつ剝がれて、秋の淡日が射して來た。ぽつと霞んだやうなお庄の目には、そこらの樣が可懷しく映つた。

お庄は下宿の少し手前で腕車を降りて、それから急いで勝手口の方へ寄つて行つた。

屋內はまだ靜かであつた。お庄は簾のかゝつた暗い水口の外に彳んで、暫く考へてゐた。

「如何してこんなに早く來ただい。」

主婦は上つて行くお庄の顏を見ると言出した。蒼白めたやうな頰に、薄い鬢髮が粘着いたやうになつて、主婦は今起きたばかりの慵い體をして、莨を喫つてゐた。

お庄は唯笑つてゐた。

「小言でも言はれただかい。」

「いゝえ。」

「何か失敗でもしたろ。」主婦はニヤ〳〵した。

「いゝえ。」

「それぢや彼處が厭で逃げて來ただかい。逃げて來たつて、お前の家はもう東京にやないぞえ。」

お庄は袂で括れたやうな丸い顎のところを拭いてゐた。

「それに彼處は御父さんが、ちやんと話をつけて預けて來たものだで、出るなら出るで、又その話をせにやならん。お前は默つて出て來ただかい。」

「……。」

「そんな事しちや好くないわの。向も心配してゐるだらうに。」と、主婦は煙管を下におくと、臺所の方へ立つて行つた。そして、楊枝を使ひながら、「家へ歸つたつて好いこともないに、如何して淺草で辛抱しないだえ。銀行へ預けた金も些とはあると云ふではないかい。」

お庄は暫く見なかつたこの部屋の樣子を、じろじろ見廻してゐた。

奥から二男の糺も、繁三も起出して來た。今茲十九になる糺は六かしい顏をして、白地の寢衣の腕を掩りあげながら、二十二三の青年のやうに大人ぶつた樣子で、火鉢の傍に坐ると、ぽかぽか莨を喫出した。

「糺や、お庄が淺草の家を逃げて來たとえ。」と主婦は大聲で言つた。

糺は目元に笑つて、默つてゐた。

「又詫を入れて歸つて行くにしろ、此まゝ出て了ふにしろ、斷なしに出て來ると云ふのは好くないで、お前は葉書を一枚書いて出しておかつし。」

糺は煩さうに口を歪めてゐた。

朝飯のとき、お庄も衆と一緒に餉臺の周に寄つて行つた。

「淺草へ行つてから、お庄も悉皆樣子が好くなつた。」糺は飯を盛るお庄の橫顏を眺めながら

笑つた。

十二

こゝの下宿は私立學校の醫學生と法學生とで持切つてゐた。長いあひだ居着いてゐるやうな人達ばかりで、菊太郎や糺とも親しかつた。中には免狀を取りはぐして、頭腦も生活も荒んで了つた三十近い男などが、天井の低い狹い部屋にごろ〳〵して、毎日花を引いたり、碁を打つたりして暮した。夜はぞろ〳〵寄席へ押しかけたり、近所の牛肉屋や蕎麥屋で、火を落すまで酒を飲んだりした。北廓の事情に詳しい人や、寄席仕込の藝人などもあつた。

「××さんも何時免狀をお取りなさるだか。お國の御父さんも、悉皆田地を賣つておしまひなすつたと云ふに、然うして毎日々々茶屋酒ばかり飲んでゐちや濟まないぢやないかえ。」

主婦は楊枝を銜へて帳場の方へ上込んで來る書生の懦弱な樣子を見ると、苦い顏をして言つた。

「私等ンとこの菊太郎も實地はもう澤山だで、今茲は病院の方を罷さして、此秋から田舍に開業することになつてをりますでね、私もこれで一安心ですよ。病院ももう建前が出來た樣子で、昔のことを思や地面も三分の一ほかないけれども、舊の家の跡へ親戚で建つてくれたと云ふもんだでね。」

主婦は同じやうな事を、一人に幾度も言つて聞かせた。

その書生は鼻で遇つて、主婦が汲んで出す茶を飲みながら、昨夜の女の話などを爲はじめた。

「あれ、厭な人だよ、手放しで惚氣なんぞを言つて。」と、主婦はじれ〳〵するやうな顏をした。

するうちに、奧の暗い部屋で差で弄花が始まつた。主婦は小肥りに肥つた體に、繻子の半衿のかゝつた軟かい袷を着て、年にしては派手な風通の前垂などをかけてゐた。黑繻子の帶のあひだに財布を挾んで、一勝負する毎に、ちやらちやら音をさせて勘定をした。

學校から衆が歸つて來ると、弄花の仲間も殖えて來た。二男の糺も連中に加はつて、出の勝つ母親の亂次のない引方を尻目にかけながら、可怕らしい顏をしてゐた。

夕方になると、主婦は乘のわるい肌の顏に白粉などを塗つて、薄い鬢を大きく取り、油をてらてらつけて、金の前齒を光らせながら、帳場に坐込んでゐた。

「お神さんが又白粉を塗つてゐるのよ。」と、女中は蔭でくす〳〵笑つた。

「××さんが此頃外に女が出來たもんだから、燒けて爲樣がないのよ。」

女中は廊下の手摺に凭れながらお庄に言つて聞かせた。

この書生は、外へ出ない時は能く帳場の方へ入込んでゐた。主婦と一緒に寄席へ行くこともあつた。歸りには其處らの小料理屋で一緒に酒を飲んで、出て行つた時と同じに、別々に歸つて來た。その書生は二十八九の、色の白い、目の細い、口の利方の優しい男であつた。

主婦が其部屋へ入込んでゐるのを、お庄は幾度も見た。

「ちよいと〳〵、面白いものを見せてあげよう。」剽輕な女中はバタ〳〵と段梯子から駈降りて來ると、奧の明みへ出て仕事をしてゐるお庄を手招ぎした。

女中は二階へあがつて行くと、足を浮して盡頭の部屋の前まで行つて、立停ると、袂で顏を抑へてくす〳〵笑つてゐた。

十時頃の下宿は、どの部屋も〳〵シンとしてゐた。置時計の音などが裏からかち〳〵聞えて、偶に人のゐるやうな部屋には、書物の頁をまくる音が洩れ聞えた。

お庄は逃げるやうに階下へ降りて行くと、重苦しく呼吸が塞るやうであつた。

お庄は冬の淋しい障子際に坐つて、また縫物を取りあげた。冷い赭い疊に、蠅の羽が弱々しく冬の薄日に光つてゐた。

十三

横濱の店を仕舞つて、一家の人達がまた東京へ舞戻つて來るまでには、お庄も二三度その家へ行つて見た。

家は山手の場末に近い方で、色の褪せたやうな店には、品物が幾許も並んでゐなかつた。低い軒に青い暖簾がかゝつて、淋しい日影に曝された硝子のなかに、莫大小のシャツや靴足袋、エツプルのやうな類が、手薄く並べられてあつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com